

16) カネーション

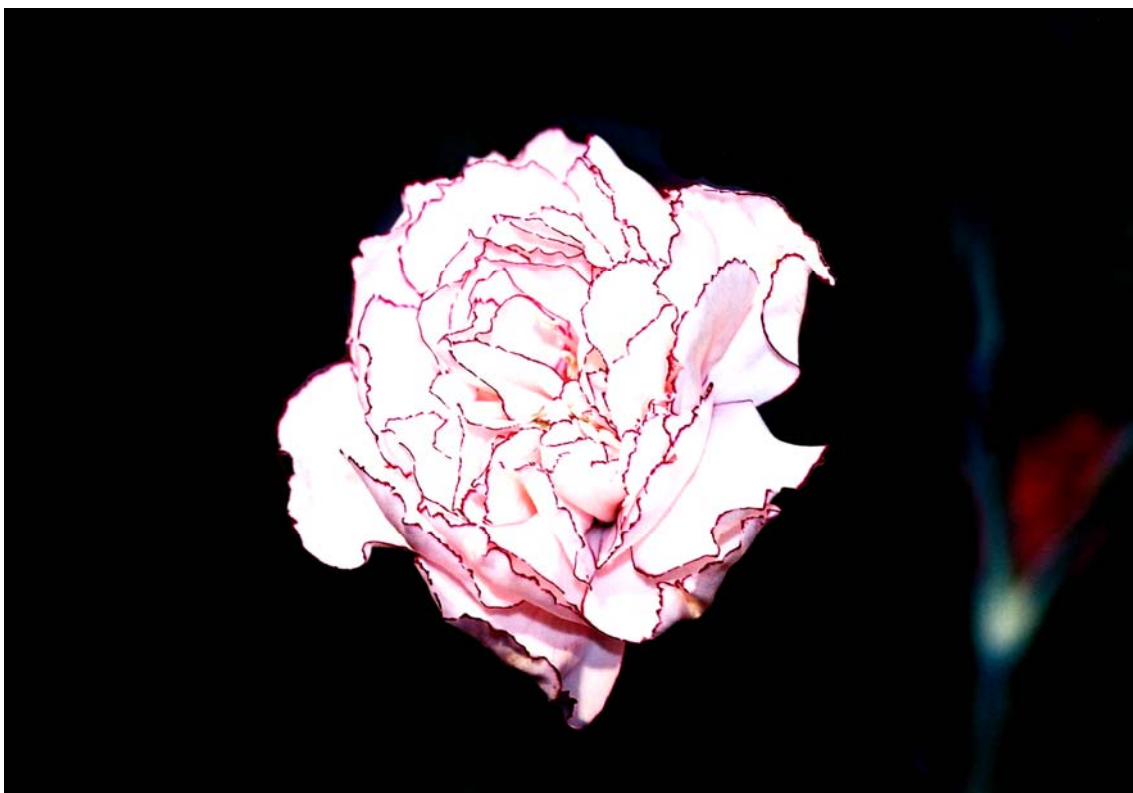
カネーションはナデシコ科の多年草で、原産地は西アジアから南ヨーロッパである。和名の起こりは英国名の『carnastion』をそのまま用いたもので、別称としてオランダナデシコ、ジャコウナデシコなどとも呼ばれていたが、最近では別称が使われることは殆どない。学名は『*Dianthus caryophyllus*』で属名はジュピター(ゼウス)の花の意。種小辞は丁香のことで、芳香を持った花と言う意味である。

英国名が『carnastion』であることは前述の通りだが、その語源は肉=caro に由来し、この花の原種が肉色をしていることに因む。もっともこれには異説もあり、その説によるとラテン語で「花冠」を意味する『corona』に由来し、この花が花冠を作るのに欠かせなかったからともいわれている。花輪とか花冠を意味するコロネーションが訛ったというわけである。またフランスでは『oeillet』である。

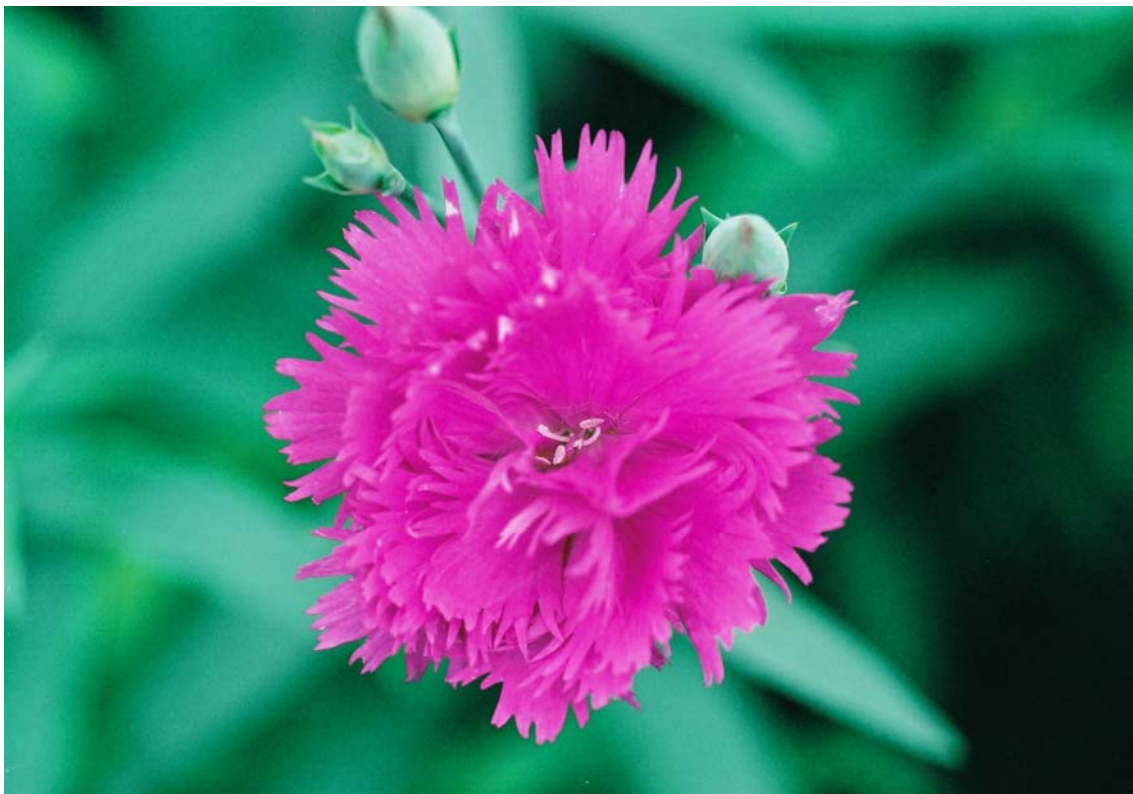
カネーションが日本に渡来したのは江戸時代で、1660年頃とされているが定かではない。しかし明治時代になると、切り花として庶民が部屋に飾るようになり、明治末期には温室栽培が盛んに行なわれ、この花も大量に経済栽培されるようになった。日本では母の日にカネーションを胸に付けたり、母親にプレゼントする習慣がある。しかしこの習慣はアンナ・ジャービスというアメリカ人女性が、自分の母の命日に集まった人々に、この花を配ったのが始まりである。アメリカでは1914年、5月の第2日曜日を母の日と定めることとなり、この花が母の日のシンボルとなって、日本にも伝わった。

ヨーロッパではカネーション栽培の歴史は極めて古く、遠くギリシャ時代に遡り、古代ギリシャ人はこの花をゼウスに捧げたといわれ、これが属名にも反映されている。古代ローマ時代『博物誌』を記したプリニウスによれば、カネーションはアウグストゥスの時代にスペインで発見され、葡萄酒などに香りを付けるのに用いられていたという。またカネーションはビールの香りを付けるためにも利用され、砂糖漬けにされた花卉は強心剤としても用いられた。一方キリスト教の世界では、十字架に張り付けられたイエスを見送ったマリアの目から、こぼれ落ちた涙から生えた草といわれ、母性愛の象徴になっている。母の日の花となったのは、こうした歴史を秘めていたからでもあった。しかしフランスではこの花を女優に贈ることは契約解除の意味とされており、契約を継続するときにはバラの花を贈る慣わしになっている。

イタリアのロンセッコ家では、家紋にカネーションの花を用いている。その昔マルガリータ・ロンセッコが、新婚の夫オランダの出陣に際して、自分の髪の毛と純白のカネーションを贈ったが、ある日一人の伝令がオランダの戦死の報と、すっかり萎びて種子が熟し、鮮血で赤く染まったこの花と、それに彼女の髪の毛を遺品として持参した。彼女は深い悲しみの中でこの種子を蒔いて大切に育てると、やがて花をつけ、花卉は純白で花芯は鮮血で染まったように真紅の花が咲いたと伝えられている。カネーションはそんな悲しい歴史も秘めた現代の花なのである。



カネーションの花、赤いカネーションの花言葉は『母の愛情』。白いカネーションの花言葉は『亡き母をしのぶ』とか、『亡きがゆえに知る母の愛』なのだという。



カネーションはまた 2011 年 10 月 3 日にスタートした朝の連続ドラマ(NHK)のタイトルでもあった。



赤いカーネーションは母への感謝を表すものとされてきた。



小学校の頃、母親の亡くなった子は父親への感謝を伝えるためとして、白のカネーションを胸につけるように言われたが、何か釈然としないものがあった。戦争直後のことで、父親が戦死して片親の同級生が多かった時代のことである。今はどうなっているのだろうか。



今ではカネーションの品種改良が進み、赤や白だけでなくこんなオレンジもある。



こんな淡いブルーのカネーションも開発されており、カネーションは今では切花の代表の一つでもある。バラや菊などと同様に、ほぼ一年中利用することができる。 [目次に戻る](#)